

造られたどんな抗生物質にも耐性を持っていて、将来別の抗生物質が造られてもそれが役立つとも思えない。

もう一つの要素として細菌の免疫遺伝子がある。細菌は猛威を身につけて再現してくるがこれは細菌が動く標的だからだ。何十億の細菌のうちの一つだけが抗生物質に負けないような遺伝子の変異を気まぐれに起こしたとすると、その耐性は同じ細菌の次の世代に引き継がれて行く。たとえばペニシリンに対する耐性を獲得する細菌は細胞膜の形を変えてペニシリンがそこに付着できないような標的になってしまふことによって耐性を獲得する。製薬会社長年にわたり、より強力な（より高価でもある）抗生物質を作ってこれに対抗してきた。

しかし細菌の方は自分の免疫遺伝子を使って防御力を強めて賭け金を引き上げ続けてきた。抗生物質に対抗する細菌のこのような防御力は全てが偶然の変異によるものではない。

「スーパー細菌」はプラスミドと呼ばれる自己転写をする小さなDNAの環をお互いに交換することで、抗生物質に対抗する共同戦線をはっているものなのだ。このプラスミドは細菌の主要な染色体の上には宿っていない補助的な遺伝子を含んでいる。加えてこのような病原菌は「ジャンプする遺伝子」というDNAのかけらも持っていてこれは一つの細菌から他の細菌に飛び移る。タフト大のS・レヴィイ博士は「バクテリアとは個々に切り離された一個の生物ではなくてお互いに作用し合うバクテリア世界という大きな世界の一部分なのだ」といつている。

抗生物質が全く効かない「スーパー細菌」

細菌は宿主の体の中でまたたきする間に増えて行く——五分以内に増殖を繰り返して行く細菌もある。増殖のプロセスの中では投与された何かの薬に対する防御力を生み出すような遺伝子の変異も起こり得る——たとえばペニシリンの分子を分解して無害なものにしてしまふ酵素が造られたりする。そして細菌はこの種の遺伝子の武器を自分の子孫にすぐに伝えることができる。

このような「スーパー細菌」変異は「多剤耐性種」を生み出したりする。一九九二年に大都市や病院を襲った結核菌の一つのタイプもその一例だった。この結核菌は同時に幾つもの薬に対する耐性を持っていて五〇%の患者の命を奪ったのだった。

より一般的なのがブドウ球菌でこれが傷に取り付くと致命的な結果も生む。手術の間にそこから体内に侵入したり、入院患者のような抵抗力の弱った人に感染したりする。かつてこの菌はペニシリンで退治できた。しかし病院の中で世代を経るにつれブドウ球菌は、バンコマイシン以外のほとんどの抗生物質の効果をゼロにすることを学んでしまった。

そしてこのバンコマイシンという注射薬は腎臓にダメージを与えたり、聴力を失わせたりする複雑かつ深刻な副作用を生む抗生物質である。しかも、この恐ろしい抗生物質にさえブドウ球菌の一つの種類、腸球菌は耐性を獲得していて、これは腰から下の手術跡に感染する。

呼吸器感染症の二つの一般的な原因が、ヘモフィラス属のインフルエンザ菌と連鎖球菌による肺炎でこれも抗生物質への耐性を持つものになって来ている。子どもにもしばしば起こる典型的な耳と鼻腔の感染症は、連鎖球菌による肺炎が原因でおきる。これらの感染症のどちらも髄膜炎を起こすことがある。

アトランタにあるアメリカ病氣コントロールおよび予防センターによると、食物由来で薬に耐性を持つサルモネラ菌による病氣は一九七九年には全体の一六%だったのが、八九年には三二%になり現在は四四%に増えているという。

製薬業界は三〇種類かそこの抗生物質はちゃんと効果を發揮していると主張しているが、これらの耐性を持った細菌の治療に役立つような効果の確かな抗生物質などは現在ではもう残っていない。製薬会社がどのように製品化しようが全ての抗生物質は土壌中のカビやバクテリアを原料に造られていて、その作用は同じ狭いメカニズムを通じて効果を發揮するものである。耐性が非常に強いどれか一つの病原菌に感染したとすれば、読者も読者の愛する人もひどい病氣になり多分死ぬという賭になってくる。

この理由およびその他の理由から、現代には免疫力を低下させる病原菌の攻撃に対抗する手段として役立つことが証明されていて、かつ新しく、自然で害のない食品サプリメントが必要になっている。そしてこのような要望に応えられるサプリメントがすでに存在している。それがオリーブ葉のエキスで通信販売や自然食品店で医者の方箋が不要なサプリメントとして

手軽に手に入る。またごく最近では薬局でも買えるようになっていく。

本書は新しく発見された、商品登録に縛られることもない食品サプリメントの抗菌効果の全てを明らかにするものである。そして、それは少なくともノアの箱舟の時代以来この地球上に育ってきたものである。オリーブ葉のエキスは社会そのものを性的感染症、全てのタイプの耐性を持つバクテリア、イースト菌の過剰増殖、飲料水中の寄生虫、ジムやロッカールームのカビ、エボラウイルスやHIV、その他命をおびやかす新出現のウイルスから救うためにもっとも新しくベストなものと期待できるものである。そこで本書では読者が現在、あるいは今後かかるかも知れない感染症から自分自身を守るのに役立つ消費者知識を提供することになっている。

生命の樹オリーブ

人間に飼われるようになった犬と並んでオリーブの樹は人間の最良の友であり、少なくとも六〇〇〇年前から人類への特別な贈り物としてオリーブの樹のことは語られて来っていて、『聖書』はこれを「生命の樹」と呼んでいる。オリーブの枝は国連の平和を象徴する地球的なシンボルにされている。また、これは読者も後で知るように健康のシンボルでもある。

オリーブの樹は植物学的にはトネリコ、ジャスミン、ライラックなどと同じ科に属している。

今日では地中海地方の国々に広く栽培されていて、全世界のオリーブ油の九八%はこの地域の産物である。オリーブ葉のエキスはアメリカの南カリフォルニアで栽培される秀れた種類のオリーブの樹、学名でいうと「オーレア・エウロペーヤ・L」から造られている。

オリーブの樹は堅くて変化に富む材質なので戸棚のような家具の材料に珍重されている。シナイ山の山頂にいた時のモーゼが聖油を造るのに用いた材料はシナモン、ミリス、香木、それにもちろんオリーブ油であった。

ギリシア神話はオリーブの樹は女神アテナが作ったとしている。アテナはアクロポリスの岩の間にオリーブの樹を最初に植え、この樹に暗闇を照らす力、傷を癒したり性欲を取り戻させたりする力、病気を治し、栄養を補給する力などを付与した。

二〇〇〇年以上にわたりオリーブの栽培、オリーブ油やオリーブの成分による治療、オリーブ油の製造などが続けられ、これは今では一つの見事な芸術にまで発展している。オリーブやオリーブ油を使うローマ帝国時代の料理のレシピは今日でも使われている。

一九世紀までは地中海地方の家々の照明にはオリーブ油が使われていた。産業革命で出現した機械の潤滑油はオリーブ油が利用されたがこれはローマ時代の軍隊が車の車軸に使ったのと同じ使い方だった。

民間の伝承医学で火傷、粘膜の炎症、潰瘍などいろいろな病気の治療に使っていた薬の主要な材料はオリーブ油だった。

オリーブ油の単価不飽和脂肪酸が悪いコレステロールといわれる低比重リポタンパク質（LDL）のレベルを低下させることは現代医学によって証明されている。多くの臨床実験は地中海地方にアメリカに比べて心臓病が少ないのはオリーブ油を使っているためだと指摘している。

第八章で紹介しているようにエイズ患者にオリーブ葉のエキスとレモンの絞り汁、オリーブ油その他のものを混ぜた飲み物を与えたところHIVウイルスが陽性だったものが陰性に転じた。オリーブ葉のお茶を飲むのも同じように効果を發揮する。